

隠岐島五箇方言の断定表現法

神 部 宏 泰

はじめに

隠岐諸島最北の島は、「島後」と称せられる。五箇とは、この「島後」の西北端に位置する地域をいう。他地域とは山脈によって限られていて、地理的環境のまとまりはよい。いま、この五箇の生活語を、かりに、五箇方言として把握することにする。

この五箇方言の、断定助動詞による、断定表現の生態を記述し、あわせて、隠岐全域での様相を概観するのが、本稿の目的である。

山陰地方は、「ジャ」のおこなわれる中国域内にありながらも、「ダ」の著しいことで、世人の注目を集めてきた。この山陰の、北方海上に孤立する隠岐は、どのような状況を示しているであろうか。

隠岐の、断定表現法の究明は、国語方言上の諸相の、通時論的な討究へ対しても、一定の意義をもつものと思われる。

(1) 五箇方言にあつては、「ダ」をとることによって、断定表現のしたてられるのが普通である。

○マダ ヨーチエンダ。エンマ ナナツダ。

まだ幼稚園だ。今、七才だ。(小男)

〔発話者のみ表示した場合の、聞き手は、筆者である。以下同じ。〕

○ヒチジューダ。

七十才だ。(老女↓中女)

○ソエダ。ススンダ ワケダ。

そうだ。八世の中がV進んだわけだ。(老男)

○ガツコ イクマデダ。

学校へ行くまでだ。(青女↓小女)

○ハタデ オルノダ。ニョーバガ。

織で織るのだ。女が。(老男)

「ダ」は、体言、または、体言に準じるものに接する。第四例の「イクマデ」、最後例の「オルノ」も、体言に準じる機能をみせ、「ダ」によって統轄されている。準体助詞「ノ」は、「ン」ともなつて裏現する。

第三例の「ソエダ。」は、いわゆる指示代名詞「それに」、「ダ」の接したものである。この種のもは、肯定の応答ことばとして慣用されている。

○ソイダ。ソイダ。

そうだ。そうだ。(青男↓同)

次のように、疑問詞をもつ文は、問いかけの機能が顕著である。

○チーサン。トーチャンワ ナンネンウマレダ。

おじいさん。お父ちゃんは、何年生れなの。(青女↓老男)

○ナンボダ。アンチャン ナンボダ。

いくらだ。兄ちゃん、いくらだ。(小男↓同)

○ナンダ。

なんなの。(小女↓青女)

この際、文末に、何らかの特定の声調の加わるのが常である。第二・三例の、「ダ」は、問いかけの声調の、一種の習慣的なものであって、その特異さが注目される。

述部を、「ダ」で結んだ叙述を、文末詞が、最終的に統轄している例も多い。例えば、次下のとおりである。

○コリヤー ワヤダ ナー。

これは、むちゃだねえ。(青女↓小女)

○アテ アイダ ワナ。

二

ほら、あれだね。(青男↓同)

○ホントダ ジャ。

ほんとうだよ。(青男↓中男)

これらの文末詞は、ものそれぞれが、特殊な表現味をみせて、断定の叙述を包み、訴えかけの機能をもって存立している。

(2) 以上のとおり、五箇方言にあっては、断定表現に、「ダ」のおこなわれるのが普通であるが、一方、この「ダ」とともに、「ジャ」もおこなわれている。この「ジャ」は、「ダ」にくらべると、きわめて淡い。ともあれ、両形並存の事態には、注目をきそわれる。

○フターツモ ウエジャ。

二つも年上だ。(老女↓青男)

○モトノ ゴカニ イク プンジャ。

もとの五箇へ行く道だ。(中女)

○コヤ デエガジャ。

これは誰のだ。(老女↓同)

「ジャ」は、体言、または、体言に準じるものに接する点では、「ダ」と同様である。最後例の、「ダエガジャ」の「ガ」は、「ノ」とあるものより、そんなにいいかたである。概して、「ジャ」には、「ダ」にくらべて、気楽さ、ぞんざいさが認められる。

以上に、「ダ」「ジャ」並存の状況について注目してきた。とこ

るで、この助動詞の、「未来形」「完了形」にも、また、「ジャラー」「ジャッター」「ダラー」「ダッター」の両形が並存している。さきの「ダ」「ジャ」では、「ダ」の優勢を指摘してきたのであるが、これは、逆に、「ジャラー」「ジャッター」の、抜きん出た優勢を指摘することができる。「ダ」とともに、「ジャラー」「ジャッター」の頻用されている事態は、また、とりわけ興ふかい。次下には、おのおの、存立の状況をみよう。

(1) a. まず、「ジャラー」をとりあげる。

○サツマイモジャラー。

廿諸だらう。(小男↓同)

○アリヤー カヤブキジャラー。

あれは、茅葺きだらう。(青女↓老男)

○ソゲナ モンジャラー。

そんなものだらう。(中男↓老男)

○シエメンノ アクガ デタ トコジャラー。

セメントの灰汁が出たのだらう。(老男↓同)

○ド|ガナ ジュウ カクジャラー。

どんな字を書くのだらう。(小男↓中女)

○コタエタジャラー。アエモ。

まいっただらう。あいつも。(青男↓老男)

○コトバガ ワカーカネマスジャラー。

ことばがわかりかねますでしょう。(中女)

ここで、「ジャラう」が「ジャラー」となっていることに、まず注意される。これは、「らう」の「[r]」が「[r:]」を経て「[r:]」に安定した、いわば閉音「[r:]」の痕跡を示すいいかたとされる(藤原興一先生

「文法」八日本方言学所収V二四四ページ参照)。この種のいいかたは、五箇のみに限らず、隠岐全域におこなわれていて、ほとんど例外がない。

「ジャラー」は、体言・用言、または、それらに準じるものに接して存立する。

以上は、いずれも、話し手の、疑い・おしはかりをもちかけるものである。

さて、五箇方言には、「ジャラー」のほかに、「ジャラーズ」のいいかたがある。

○ソ|ンチョーサンモ ナガネン シテ ゴダツタジャラーズ。

村長さんも、永年、していられただらう。(老女)

○ナ|カノ ゴーガ オージャラーズ。

「中」のじいさんがいるだらう。(中男↓老女)

○オ|マエ コンド コエ トルジャラーズ。

おまえ、こんどこれを取るだらう。「碁」(老男↓中男)

この、「ジャラーズ」のいいかたは、主として老年層におこなわれる。その勢は弱い。

さて、全層に、わりとよくおこなわれる反撥的ないかたに、つぎのようなものがある。

○ア|ゲナ シカタ シテ クー モンジャラーツ カイ。

あんなしかたをして行くことがあるか。(老女↓小男)

○シ|ェンモンジャラーツ ケ。

専門であるかい。(小男↓同)

ここで、「ジャラーツ」とあるのは、前述の「ジャラーズ」からの転化だと思われる。このことは、「ウチコジャラーズ カイ。人神在

のV氏子であろうかい。」のように、意味・音声上の同じ環境に、「ズ」のあらわれる例の、まれにみられることから、推察される。

「ジャラーツ」といういいかたは、「カイ」または「ケ」文末詞に統轄されての、反撥表現にみられやすい。さきの、未来法の「ジャラーズ」が、主として老年層におこなわれるのに対して、「ジャラーツ」は、老年層のみでなく、若い層にも、よくおこなわれる。ちなみに、右のような反撥表現に、「ジャラー」の用いられることはないようである。

b. つぎに、「ジャック」をとりあげよう。

○トーカマデニヤル アテジャック。

十日までにやるつもりだった。(小男↓青女)

○ニネンジャック。

二年生だった。(中女↓同)

○ソエガ イードメジャック チョワ。

それがいいおしまいだつたそうだ。(老女↓中女)

○コフンジャック モンデス ノー。

古墳だったものですねえ。(老男)

○サンピヤクネンマエジャックジャラー。

三百年前だったろう。(老男)

最後例は、「ジャック」に、「ジャラー」の直接した、特殊な例である。

(2) 「ダラー」「ダック」をとりあげる。これは、先述のとおり、前項の「ジャラー」「ジャック」と並存している。が、「ジャラーツ」にくらべて、劣勢である。

a. はじめに、「ダラー」をとりあげる。
○ジューニジノ バスダラー。

十二時のバスだろう。(小女↓同)

○ドイツノ プンダラー。

どれだろう。(青女↓小男)

○ハイチャーダラー。ミシンイトガ。

入っているだろう。ミシン糸が。(青女↓小女)

○ワカイダラー。チット。

若いだろう。少し。(中男↓同)

「だろ」が「ダラー」とあつて注意されるが、これも、「ジャラー」の場合と同様、開音(ロ:)の痕跡を示すいいかたである。このいいかたも、隠岐全域にみられる。

この「ダラー」は、若い層の人たちによって用いられることが多い。若い層も、とくに、女性に多いようである。ある女子高校生は、これを、「ジャラー」にくらべて、スマートないかただと評してもいた。そのおこなわれざまをみても、たしかに、若い人たちが、「ダラー」に、一つの清新さを意識しているさまがうかがわれる。

「ジャラー」「ダラー」は、同一人によって、並用されている。ある中年の男子は、同一の場席で、

○メージノ ハジマリジャック トコジャラー カ。

明治の始めだったのだろうか。

○ヒナワジューダラー ワナ。

火縄銃だろうよね。

の二文を、ほとんど時を同じくして、発した。また、ある老翁は、

○パーサンジャラーが、ヂーサンダラーが。

ばあさんだろうが、じいさんだろうが。

と、同一文中に、兩者を並用した。このような状況であるが、大勢は、先述のとおり、「ダラー」は、若い層にあつたということができよう。

さきに、主として老年層にみられる「ジャラーズ」のいいかたに注意したが、「ダラーズ」といういいかたは、ほとんどおこなわれないといつてよい。

b. ついで、「ダッタ」をみよう。

○ソリヤー トテモ。イバツタ モンダッタ。

それはとても。いばつたものだった。(老男)

○ヤラレテ モー ケー アワレナ コトダッタ。

やられて、もう、ほんとにあわれなことだった。(老男)

○シャンムリ ヤラツシャル フーダッタ ワ。

むりやりおやりになる様子だったわ。(中女↓同)

○ウン。コーコノ ホーガ エツトダッタ。

いや。高校の方がたくさんだった。(小男↓老女)

これも、若い層にみられがちではあるが、「ダラー」の場合ほど、顕著なかたよりはないようである。

以上、「ジャラー」「ジャッタ」、「ダラー」「ダッタ」両形並存の事態をみてきた。この兩者のうちでは、「ジャラー」「ジャッタ」が、とりわけ頻用されていて興味ふかい。このことは、先述の「ダ」「ジャ」のうちで、逆に、「ダ」の頻用される事態と対比してみたとき、いっそう注目をさそわれる。

三

上述の「ダ」「ジャ」は、特定の現場にあつては、次下のような叙法にしたがう。

(1) 連体法

連体法に立つ場合には、「ナ」が用いられる。共通語では、この種の「ナ」は、準体助詞「ノ(ン)」に連なるのが、普通の用法である。が、五箇方言では、そのような用法とともに、「ナ」が、体言に直接する用法がある。

○ワシラー ルスナ トキデスケ ノー。

私なんか留守の時ですからねえ。(中女)

○シェワナ カカジャツタケ。

世話好きなおかみさんだったから。(老男)

○オンナ コタ オソダ。

うそほうそだ。(青男↓中男)

○アエリモ イツシヨナ モンダ。

あれらも同じものだ。(老男)

○ワシヤ コレホドシナ オモイオ シチヨリマスケー。

私は、これほどの考えをもっていますから。(老女)

これらの文例にみられるとおり、体言に直接する「ナ」のおこなわれざまは、共通語のそれからすれば特異である。が、これも、国語表現法の、一つのすがたともいえる。

この「ナ」が、

○ソエナンダケ、 それだから、

のように、準体助詞「ン」に連なる場合、「ナ」は、
○ソエナンダケ サビーワ キライダ ノー。

それだから寒いのはきらいだねえ。(老女)
のように、「ダ」となって実現しやすい。

○オ₁ケナ ヤマ₁ダン₁ダケ、
大きな山車なんだから、(老男)

○ハナシニ スカノ ニンゲ₁ダン₁ダケ。

話しを好まない人間なんだから。(中女)

○ソエモ ムカシノ モン₁ダン₁ダケ ノー。

それも昔の者なんだからねえ。(老女)

○オリグイ シュニヤ₁ シュメ₁ダン₁ダケ ノー。

売り食いをしなくてはどうにもならないんだからねえ。

(老男)

「ナ」が「ダ」となるのは、右のような、「ダンダケ」といういかたの場合に多い。それだけに、「ダンダケ」にみられる各語のつながりが緊密で、いわば、「ダンダケ」は、それだけで、「接続法」に立つ、一種の慣用的ないかたになっているともみることが出来る。

(2) 連用法

連用法に立つ場合には、

○ドコガ ヤドデ ゴザル。

どこが宿です。(老女)

のように、「デ」がおこなわれる。

○マー ジキ イノツ₁ジャー ネー カノ。

もうすぐ帰るのではないかね。(小女)同)

○ヌクイジャ ネー カ。

暑いではないか。(中男)同)

このように、「では」を認出しうる「ジャ」もさかんである。この「ジャ」は、

○アルダ ネー カノ。

あるではないかね。(小男)

のように、「ダ」となって実現する場合もある。この事象からみても、当方言に、「ダ」の著しいさまがうかがわれよう。

(3) 仮定法

仮定法に立つ場合には、「ナラ」がおこなわれる。

○ルスナラ マタ ゴザイ。

留守なら、またいらっしゃい。(老女)中女)

○タカナラ オラー ガ。

鷹ならいるだろうよ。ね？(小男)同)

この「ナラ」は、接続の機能をもって、文頭におこなわれることがある。そういう文頭での用法のなかで、別れのあいさつことばに慣用されているものが、とくに注目をひく。

○ナラ イニマス ジャ。

では、帰りますよ。

○ナラ マー。では、まあ。

○ナラ。では、△さようなら。▽

(4) 中止法

中止法に立つ場合には、「ナリ」がおこなわれる。

○ボロケル モノワ ボロケ₁マスナリ ノー。

葉ちる者は落ちますしねえ。(老女)

○ナカナカ エワレ₁モ シュエ₁ナリ ノー。

なかなかいわれもしないしねえ。(中女↓老男)

○ノトロニゾーリモツクリマスナリハ。

たくさん草履も作りますしねえ。(老女)

「ナリ」には、単に、接続の機能をもって立っていると認められるものもある。

「ナリ」には、また、並列の用法がある。

○サカミチモゴザンスナリナルナトコモゴザンスナリ。

坂道もありますし、平らなところもあります。(老男)

○ナイチトモチカイナリナギモイーナリ。

内地とも近いし、波もおだやかだし。(老男)

○シマモホンシナリザイサンモホンシナリ。

島も小さいし、財産も少ない。(老女)

右のように、「ナリ」は、並列された叙述のそれぞれを統轄し、相呼応して、特色ある「並列表現」を成立させてもいる。この種の「ナリ」は、主として、活用語に接続して用いられる。さて、「ナリ」に上接する形容詞は、「ホソシ」のように、「シ」に終る形のとられる場合が多い。

四

助動詞「ダ」には、その本来の用法の外に、「拡張された用法」がある。この「拡張用法」は、主として、文末と、文中の接続点とにみられる。

(1) 文末にみられる拡張用法

a. ○アエモルスダダ。

あの人も留守だよ。(老男↓中女)

右の例文の、末部の「ダ」は、助動詞「ダ」によってしめくくられた叙述を受けて、存立している。つまり、末部の「ダ」には、統轄機能と、聞き手への呼びかけ機能とが明らかで、助動詞としての諸要素の拘束を脱し、文末に遊離して存立しているさまが認められる。これは、すでに、文末詞化した「ダ」とすることができようか。(藤原興一先生「国語諸方言上の『ダ』『ジャ』『ヤ』」八広島大学文学部紀要・一九五九・三V参照)

訴えかけを本性とする文の、末部に位置する語は、すべて、文末特定の要素となる契機を備えているとされるが、この「ダ」も、文末に頻用されて、しだいに、用法を拡張していったのであろう。

○オレモイクダ。

僕も行くよ。(小男)

○イキガキレーダ。

息が切れるよ。(老男)

○アブリナオサニヤクサイダ。

あぶりなおさないと、臭いよ。(青女↓老男)

○エモカカエテイカンダ。

とてもかかえて行けないよ。(中女↓老男)

○カジエガワルイコトシマスダ。

風が悪いことをしますよ。(老男)

ここにみられる「ダ」は、述部に立つ活用語の、いわば、終止形——ともいえる形を受けて立っている。それだけに、「ダ」の、文末に遊離孤立しているさまを認めやすい。

以上にとりあげてきた、文末詞化した「ダ」は、いわば、告知の機能を示すものとするができるが、次下にとりあげるものは、それが、質問表現をしたてる機能をもになっていると認められる。

○コエデ ナンボダテテ テオダ。

これでいくらだというの？ (中男↓中女)

○ドダ スツ ダー。

どうするの？ (青女↓同)

○マー イー ダー。

もういいかい？ (小男↓同)

文末詞化した「ダ」は、また、命令・勸奨表現をしたてる機能をもになっていると認められる。

○オーバ キテ ク ダ。

オーバーを着て行けよ。 (老女↓小男)

○ヤメル ダ。

やめろよ。 (青男↓小男)

○ムコー イク ダー。

むこうへ行けよ。 (小女↓小男)

右の、文末詞化した「ダ」は、性別・年令の別なく、日常、さかにおこなわれている。

b. 右の文末助詞化した「ダ」は、下に、他の文末詞をとり、いわゆる複合文末詞としても存立する。その主なものに、「ダカ」「ダガ(ガ)」「ダワ」などがある。

①「ダカ」は、次下のおこなわれる。

○コンヤ イク ダカ。

今夜、行くのか。(中女↓中男)

○ワレ マク ダカ。

自分がまくのか。「おはじき」(青女↓小男)

○カヨイ ダカ。

通うのか。(小女↓同)

問いかけの機能をもって立つ、これらの「ダカ」は、だいたい、「のか」に近い意味でおこなわれている。わりと、女性に多いいかたである。

②「ダガ(ガ)」は、次下のおこなわれる。

○モツチョー ダガ。

もっているよ。(小女↓同)

○フトガ モツテ キテ ソナエマス ダガ。

人がもってきて、供えますよ。(老女)

○ワシャー ゼニユー ダシエーデモ エーダガ。

わたしはお金を出さなくてもいいよ、ね？(老女↓老男)

「ダガ(ガ)」は、告知の機能を示すものである。が、次の

○ハヤ イク ダガ。

早く行けよ。(中男↓小男)

の「ダガ」のようなものは、相手の意図に、いくらか関心を拂ったおもむきの、命令表現をしたてる。

③「ダワ」は、次下のおこなわれる。

○カルピスダ ガ。ワカッチョー ダワ。

カルピスだ、ね？わかつているよね。(小女↓青女)

○シヤーガ ネー ダワ。 ホントニ。

しやうがないよね。ほんとに。(中女↓中男)

○ドコモ ドコデス ダワ。

どこもどこですよ。(老男)

「ダワ」は、告知の機能が認められるにしても、自己主張性がつよい。

○ハヤ エク ダワ。

早く行けよ。(青男↓小男)

これは、さきの「ダガ」と違って、相手の意向に頓着しない、つきはなしたおもむきの、命令表現をしかたしている。

「ダ」にかかわる、いわゆる複合文末詞としては、右にあげたものの外に、「ダノ」「ダナ」「ダツ」「ダニ」「ダデ」「ダモノ」などがある。

(2) 文中にみられる拡張用法

a. 「ダ」には、そこで終わらないで後へ続く文の要素と、一体となり、接続の機能をもっておこなわれるものがある。

○ゴリヤクが ナカッタダケニ。

御利益がなかったから。(老男)

○パーサンガ マダ モドランダケ コラエンテテ。

おばあさんがまだ帰らないから、来られないって。(小女↓中女)

なお、次下のようなものがある。

○ホンダダケ。

ほんとうだから。(中女↓同)

○ワシラ ソトダダケ。

ぼくらは外側だから。「遊び」(小男↓同)

これらの「ダケ」は、助動詞「ダ」を受けておこなわれている。「ダケ」の、一体のものとして、熟用されているさまがうかがわれるよう。

さて、

○オヤジガ オッタエド ノー。フトリ。

おやじがいるけれどねえ。一人。(青男↓同)

○トキナニ キクダエド ナー。

時々聞けれどねえ。(小女↓中男)

この例にみられる「ダエド」は、どんな成立のものか。

同じ逆接に立つもので、「ダエド」の外に、「チーサンガ 1。アツコター アツクエド ノー。(おじいさんがねえ。いることはいたけれどねえ。)」にみられるような「タエド」のいいかたがある。これは「たれど」からのものである。右の「ダエド」も、この姿勢のもので、「だれど」(↑「でれど」)に由来するものとすることができ。

b. 助動詞「ダ」は、また、次下のように、いわば、副助詞ともいえる機能をもっておこなわれている。

○ナワダ ナンダ ナー。ヨル コシラヨ一ツタデ ゴザンス。

繩とかなんとかねえ。夜、作っていました。(老男)

○ギューニクダー ブタダー ジェンジェン テニ アイマシエ

ン。

牛肉とか豚とか全然食べられません。(老女)

これらは、並列の機能をみせている。

右のような並列の機能によって存立しているものに、別に、「ダ

リ」「ダエ」があって、頻用されている。

○エマト チガッテ イシャダリ ナンダリ アリヤー シマ
シエズ ノー。

△昔はV今と違つて、医者とかなんとかありはしませんしねえ。(老男)

○シロダエ ナンダエ ゴワヘン。

△昔のローンソクはV白とかなんとか△のはVありません。

(老男)

この「ダリ」「ダエ」は、「であれ」に由来するものとされる。

以上が、助動詞「ダ」の拡張用法である。

助動詞「ダ」の拡張用法は、上述のとおりさかんなのにひきかえ、「ジャ」の拡張用法は全くみられない。この事態は、「ダ」「ジャ」存立上の、著しい差異の一つであつて、注目に値する。

五

ここで、隠岐島における、五箇以外の地域での、断定助動詞の存立事態を概観しよう。

「島後」では、一般に、南部の西郷地域の言語状態は、北部の五箇地域の言語状態に、対立する傾向を示しがちである。断定助動詞の存立事態にも、両地域で、いくらかの差異が認められる。

先述したとおり、五箇地域では、いわゆる終止のいいかたに、主として「ダ」がおこなわれるにもかかわらず、その活用形では、「ジャラー」「ジャッタ」が頻用されている。さて、西郷地域では、「ダ」とともに、「ダラー」「ダッタ」が頻用されているのである。この「ダラー」「ダッタ」は、若い層において、とくに著しい。

もとより、西郷地域でも、「ジャラー」「ジャッタ」はおこなわれている。が、これは、当地域の周辺部に濃く、中心部に薄い。西郷出身の、ある高校生は、このような「ジャラー」「ジャッタ」を、田舎ことばだと評した。一般に、「ダラー」「ダッタ」に、新鮮で、より高い待遇を認めているのである。

「島前」では、全域に、「ダ」がおこなわれて、「ジャ」は、ほとんどきかれない。活用形では、「島前」の中核をなす西島・中島に、「ダラー」「ダッタ」がきわだっている。ところが、南方に孤立する知夫島では、「ダラー」「ダッタ」とともに、「ジャラー」「ジャッタ」が、かなりおこなわれていて注目される。

六

五箇、および隠岐全域の、断定助動詞の生状態は、上述のとおり、かなり複雑である。断定助動詞の、このような自由な動きの中に、隠岐人たちの、如実な生活表現の一端をみる事ができるようにも思われる。

隠岐方言の断定表現法の把握は、なお、今後の討究にまよところ
が少なくない。

△付記V

本稿は、藤原與一先生の御指導を賜つて、成ったものであります。あつく御礼申しあげます。

(熊本商科大学講師)